



# 佐藤泰正

下関市

(1917～2015)



## 【著作】

『近代日本文学とキリスト教・試論』

(昭和38・基督教徒兄弟団)

『文学その内なる神 日本近代文学一面』

(昭和49・桜楓社)

『夏目漱石論』(昭和61・筑摩書房) ほか

## 【閲覧情報】

梅光学院大学図書館に

「佐藤泰正関連資料コーナー」設置

佐藤泰正は、山口県の地方私学(下関・梅光学院)で教員(中学・高校・大学・大学院)として関与し力を注ぎながら、一方で、文芸評論に新しい地平を切り開き、生涯にわたり日本近代文学研究の第一線を歩みつづけた。その業績は多方面にわたるが、今や、詩の世界の芥川賞とも位置づけられる中原中也賞の設立時から選考委員であり、日本の風土とキリスト教信仰という困難な課題に取り組みつづけた遠藤周作の最も良き理解者であったことに、その典型を見ることができよう。その基底には、大学での学びの中で(ドストエフスキイ体験)があり、それは佐藤に(神に問う人間と、神から問われる人間)という、往復的、複眼的思考をもたらしこととなった。

佐藤の名を世に知らしめたのは、四十六歳の時の著作『近代日本文学とキリスト教・試論』である。そこには、宮沢賢治、中原中也、堀辰雄、遠藤周作、吉本隆明などの著作が対象とされているが、巻頭に置かれた「文学と宗教におけるひとつの問題」は、斯界に深い問を投げかけるものとなった。

そこで取り上げられたのは、芥川龍之介の晩期の評論「西方の人」の一節である。

「クリストの一生はいつも我々を動かすであらう。それは天上から地上へ登る為は無残にも折れた梯子である。薄暗い空から叩きつける土砂降りの雨の中に傾いたまま……。」

ここには、「神のひとり子」でありながら、地上に人間として生まれ、その宣教に理解を得られぬまま処刑されたイエス・クリストの姿が、情緒的、かつ、鮮明に描かれている。芥川は冷徹な芸術至上主義者であるうとしながらも、一方で宗教的救いを聖書に求めた。この「天上から地上に登る」という非条理的な表現には、芥川の深いキリスト理解が表現されているのだが、当時、日本近代文学研究の先導者であった吉田精一氏は、その芥川論の中で、「地上から天上に登るために」と、二ヶ所にわたって引用した(角川文庫「西方の人」解説)。佐藤はこれに注目し、この誤用にこそ、日本人とキリスト教、あるいは日本の風土と宗教的倫理の本質的な問題が象徴的に現れていると指摘したのである。それは、吉田氏がキリスト教に対する本質的理解を欠きながら、芥川の苦悩をまっとうに評価できるのか、という問でもあった。

吉田氏の反論は、芥川は単に書き誤って「天上から地上へ」と表記したというものであったが、当時、作家・評論家として日本の全現実に向きあおうとした高橋和巳氏は、佐藤の論旨を深く理解し、「キリスト教の投影」という書評で次のように述べた。

「『地上から天上へ登る』と、文法的にはよりスムーズな形に逆転されたことに、キリスト教精神、キリス

トというペルソナとの対面を回避して、一般的なヒューマニズムに融解してしまった日本近代精神が象徴されている。」

「キリスト」というペルソナと対面する」とは、キリストによって地上の苦しみから解放されることであると同時に、キリストによって激しく問われることであり、もつと言え、キリストに「まっすぐ」であることと、高橋氏はよく理解していたのである。

佐藤は、評論家として作家とその作品を問うことは、そのまま、自己自身が問われることであり、そこで返ってくる刃によって血が流れる場所にしか、「(真実)は立ち昇って来ないことを自覚し、生涯にわたってそこに立ち続けた。それは対象を高めから批評するのではなく、対象と同伴することでもあった(遠藤周作との対談『人生の同伴者』参照)。こうして、キリスト教に親和感を持たなかった夏目漱石や、放埒な人生を送ったかに見える太宰治や中原中也の内心に潜む(神との熱き問答)が、条理を尽して語られることとなった。それは近代文学研究に新しい地平を切り開き、世界の中に日本近代文学を位置づける視点を与えることになったのである。

また、佐藤の「問われる大学人」の自覚は、学問的成果を一般に開放する「公開講座」の設置をもたらし、早くも昭和四十六年(一九七二)から始まった講座の成果をまとめた「梅光学院大学公開講座論集」は、第六十五集を数えるに至っている。

『語り紡ぐべきもの―(文学の力)とは何か』笠間書院 平成三十年三月)

(文・中野新治)



著書